

恋をするなら蜜より甘く

プロローグ 恋をするなら

四月の日曜日、待ち合わせのカフェで、和倉美月はスマホ画面をスクロールさせ、フツと頬を緩ませた。

画面では、見目麗しい少年が、臆面もなく愛の言葉を囁いている。

「美月、お待たせ？」

目を輝かせて画面をスクロールさせていた美月は、向かいに人が座る気配で顔を上げた。

「ああ舞子、遅かったね」

学生時代からの友人、阿部舞子の姿に美月が表情を和らげると、向かいに腰掛けた舞子がひよいと彼女の手からスマホを取り上げた。

「あっ」

小さな声を上げる美月を気にすることなく、画面をスクロールさせた舞子は、すぐにつまらないといった顔でスマホを返してきた。

「ニヤニヤしながら読んでいるから、男の人からのメッセージかと思ったのに……」

そのスマホ画面には、漫画が映し出されている。

それも美月が学生時代に流行った高校生の男女が主人公の少女漫画だ。少女漫画をこよなく愛する美月のスマホの電子書籍アプリには、恋愛物を中心とした少女漫画が多数蔵書されている。

「舞子を待っている間暇だったから、昔の漫画を読んでいたの」

二十五歳にもなってお洒落なカフェで漫画本を開くのは少し恥ずかしいが、覗き見防止フィルムを貼ったスマホを眺めている分には少しも恥ずかしくない。

美月は画面を指で数回タップして、アプリ画面を閉じた。

「そんなんだから、恋人いない歴イコール年齢なんて悲惨なことになっちゃうのよ」

呆れたように笑う舞子は、水を持ってきた店員に注文をする。

高校が同じだった舞子だが、親しく話すようになったのは、大学進学のために上京してからだ。

高校時代は、学校ビエラルキーのトップに位置するグループにいる舞子と、中間層で無難に学生生活を送る美月に接点はほとんどなく、話をした記憶もない。

そんな彼女から、上京後、突然連絡をもらい、最初はとにかく驚いた。

高校時代からなにかと目立つ存在だった舞子のことは当然知っていたが、彼女が自分を知っているとはまったく思っていなかった。

だから舞子が自分の連絡先を知っていることにも驚いたし、彼女が高校時代の共通の知り合いを探してまで、わざわざ連絡してきてくれたことにも感動した。

話していると価値観の違いを感じることも多い舞子だけど、数少ない同郷の友達ということもあり、その関係は互いに就職した今も続いている。

スマホを鞆にしまった美月と入れ替わるように、注文を済ませた舞子が自分のスマホを鞆から取り出す。

綺麗にネイルで彩られた指先でロックを解除した舞子は、数回画面をスクロールさせ、ずいっと美月の鼻先にスマホを突き出してくる。

「せっかく都会にいるんだから、美月ももつと楽しみなさいよ。ずっと職場と自分の部屋を往復してるだけの暮らしをするんだったら、地元に戻れば？　って思うよ」

スマホの画面には、誰かの誕生パーティーらしい写真が映し出されている。火花の飛び散る火花がささったケーキの前に、華やかな数人の女子が微笑んでいた。

遠くの打ち上げ花火を眺める気持ちでそれを見る美月の鼻先で、舞子はどんどん画面をスクロールしていく。

ニューイヤーパーティー、ハロウィン、ヨガにバーベキュー、四季折々のリア充写真の中で、舞子はとても楽しそうだ。

「舞子、いつもお洒落だね」

スマホの向こう側は完全な他人事と割り切っている美月に、舞子が不満そうに頬を膨らませる。

「都内に暮らす女子として、このくらい標準装備。高校の頃から地味だったけど、大学含めて七年

も東京にいるのに、ダサダサな美月がヤバすぎなのよ」

「ダサいかな？」

苦笑いして、美月は自分の姿を見下ろす。

今日は舞子にバーゲンに付き合っただけと頼まれていたので、動きやすさ重視のパンツルックにローファーという服装をしている。だが、目的に合わせてお洒落はしているつもりだ。

それでも、常にお洒落に気を配っている舞子には、会う度に駄目出しされてしまうが。

美月が困り顔を浮かべると、舞子は可愛くネイルで彩られた指先をヒラヒラさせた。

小さな印刷会社に勤める美月と違い、大手企業の受付をしている舞子の指先は綺麗に整えられている。それこそ、指の先まで女子力が溢れていた。

「あ、でも美月の流行りに染まらない感じは、私的に癒やしだから。他の女友達とじゃ、こんなに気を抜いてられないもの」

慌てて慰めてくる舞子に、美月はお礼代わりにクシャリと笑った。

「美月はつり目だけど、それなりに可愛い顔立ちをしているんだから、もっとお洒落すれば少しはマシになるのに」

美月の目尻は、少しつり気味だ。人によってはアーモンドアイと評価してくれるが、美月としてはきつい印象を与えてしまうので好きではない。

「そしたら、恋人もできるかもよ」

それはあり得ないと美月が首を横に振ると、ちようど、舞子の頼んだパンケーキが運ばれてきた。柔らかそうな生地（じ）にたっぷり生クリームとフルーツが載り、パウダーシュガーがまぶされたそれは、華やかで食べ応え（こた）がありそうだ。

「すごい」

はしゃいだ声を上げる舞子は、角度を調節しながらパンケーキの写真を撮る。

そして一口だけフォークで突くと、皿を美月の方へと押し出す。

「……？」

「太っちゃうから、美月半分食べてよ」

そう言って可愛く小首をかしげる舞子に、美月は「またか」と、内心嘆息する。

舞子はよく、SNS映えするメニューを注文して写真を撮ると、役目を終えた食事を美月に押し付けてくる。

押し付ける……という表現になってしまうのは、自分で持て余しておきながら、お会計のタイミングになると「ほとんど美月が食べたんだから」と、支払いを美月に任せてくるからだ。

数少ない同郷の友達とギクシヤクするのが嫌で、結局、美月はそのままケーキを食べ始めた。

「そういえば、どこのお店に行くの？」

甘すぎるクリームの味をフルーツの酸味で中和させながら美月が聞くと、舞子がなにか企んでいそうな笑みを浮かべた。

「ああ。それなんだけど、友人として、美月の出会いの場所を作ってあげようと思って」
予想外の回答にキョトンとする美月に、舞子が指を頬に添えニンマリ微笑む。

「美月のためだよ」

その表情に、なにかしらよからぬものを感じてしまう。

「私、もう合コンとかはパスだよ。男女の出会いとか、求めてないし」

美月は素早く断りを入れる。

これまでも同じようなことを口にした舞子に、合コンに連れ出されたことが数回あった。

その場の雰囲気馴染むことも、上手く会話に参加することもできない美月は、結局、皆の料理を取り分けたり、飲み物の注文を取ったりとスタッフ状態になっていた。しかも、最後に連れていかれた合コンの帰り際、酔った男性の一人に絡まれ散々な目に遭った。

それ以降、どんなに舞子に誘われても、合コンは断るようになっている。

そもそも少女漫画のような恋に憧れている美月が、ああいう場所で上手く立ち回れるはずがないのだ。

「大丈夫。今回はそういうのじゃないから」

そう言って微笑む舞子の顔に、嫌な予感しかしない。

「私、恋愛とか興味ないから……」

そう返すものの、それが嘘だという自覚はある。

本当は、自分が恋に落ちる日を夢見ている。

偶然出会った王子様が、冴えない自分に気付いてくれて恋に落ちる——そんな、長年愛読している少女漫画のようなキラキラ輝く恋がしたい。

二十五歳にもなってなにを言っているのだか……という自覚はあるので、それを誰かに話したりはしないが。

「モテないからって、諦めるのはよくないよ」

屈託くつたくのない微笑みを向けられて、美月は曖昧あいまいな微笑みを返した。

そんな美月に、舞子は今日のイベントには予約も済ませたので、今さら断るなんてできないと主張する。

美月のために……と、不機嫌な顔をする舞子に、美月はそつとため息を漏らした。

どうやら今日の予定は、舞子の中では変更不可能な決定事項のようだ。

合コンでないことを再度確認して、美月は舞子の予定に付き合うことを承諾した。

1 王子様が振り向いたなら

カフェを出た美月は、舞子に連れられ大きな複合駅近くの商業施設を訪れていた。

美月も以前に訪れたことがあるが、都心のオアシスがコンセプトのその商業施設には、広大な敷地の要所所に世界の珍しい植物が植えられている。お洒落なテナントの並ぶ歩道を散策しながら、自然とそれを楽しめるようデザインされている。

「はい。これつけて」

「これは？」

差し出されたビニール製のプレスレットを、美月はまじまじと見つめた。

とりあえず聞いてしまったが、その答えは渡されたプレスレットにも、さつき五千円の参加費を支払われた受付にも書かれていた。

「この施設、今年いっぱい一度閉鎖して、全面リニューアルするんだって。だから、今年は記念イベントが色々あるの。これも、その一つよ。……年末に、最後のカウントダウンイベントをやるから、そこにも参加したいんだよね」

そう話す舞子は、ご機嫌な様子で、『春恋街コン』と印字されたプレスレットを左手に巻き付ける。

そして美月の持つプレスレットを取り上げると、それを彼女の手首に巻き付けてきた。

「だから私は、合コンには興味ないって。それに、買い物って聞いてたから服装だって……」

周囲を確認すれば、同じプレスレットをした女性たちは、誰もが可愛く着飾っている。女性だけでなく男性たちも、スタイルがよくラフだが洒落た装いの人が多い。

動きやすさ重視で服を選んだ美月は、どう考えても周囲から浮いていた。

美月だって、それなりに可愛い服を持っている。舞子やここにいる他の女性たちには劣るかもしれないけど、それでも今の服装よりはマシだったはずだ。

でも舞子は、渋る美月の全身に視線を走らせ、うふふと朗らかに笑う。

「こういう場所では、自然体の子の方が男性ウケいいのよ」

「そりゃ、舞子はいつも可愛くしているからいいけど……」

控えめな美月の苦情に、舞子は誇らしげに笑う。

そんな舞子に視線で抗議すると、舞子が頬を膨らまして文句を言う。

「美月のために申し込んでおいてあげたのに、そういう態度って失礼だよ」

「……ごめん」

舞子にそういう顔をされると、無条件に謝らなくちゃいけない気がしてしまう。

不機嫌を残したまま、舞子はそれでよしといった感じで表情を明るいものに変える。

「私くらいしか、美月をこういう場所に連れ出してあげる人はいないんだから、もっと感謝してよね」

「……」

私のためというのであれば、事前にちゃんと伝えておいてほしかった。そんな不満を呑み込む美月の腕を引き、舞子は施設内へと入っていく。

二人で連れ立って歩きながら、舞子は今日の街コンの流れを簡単に説明していった。施設を全て貸し切っているわけではないので、他の買い物客も利用していること。ただしこの商業施設に併設されている高級レストランだけは、この会の貸し切りとなっていること。

そしてそのレストランは大人気で、普段ならまず予約は取れないため、そこで洒落た写真を撮るのが、舞子の目的だということ。

街コンの最初と最後はそのレストランに参加者全員が集まるが、それ以外の時間はフリータイムで、施設内やその周辺を自由に散策して同じプレスレットをした気の合う人との会話を楽しめばいいとのことだ。

人気の高級レストランが会場となったこの街コンは、参加費が割高であっても人気があり、女性陣の倍額の参加費を払い街コンに参加する男性陣はハイクラスに違いないと舞子は語った。

嬉々とした顔でそんなことを語る舞子の表情を見れば、料理だけでなく新たな出会いにも期待しているのだとわかる。

「なるほど……」

今まで幾度となく舞子の合コンに付き合わされてきた美月は、諦めた顔で頷き、自分の手首を確認する。

自由時間が多く、合コンのような窮屈さはなさそうだ。

それならば、こういった場所ではいつも浮いてしまう自分が無理して参加することはない。フ

リータイムの間は、買い物気分施設内を散策して楽しめばいいだろう。

そう考えをまとめた美月は、来てしまったものはしょうがないと気持ちを切り替えるのだった。

街コン会場であるレストランは、入ってすぐの壁一面に、生花が圧倒的な迫力で生けられていた。その前で、さっそく自撮りを始めた舞子を待つ間、美月は花と一緒に壁に生けられている多肉植物を興味深く眺める。

「美月も一緒に撮ろうよ」

ひとしきり自撮りを済ませた舞子が、壁に顔を近付け、奥の仕組みを調べていた美月に声をかける。

「えっ、私はいいよ……ッ」

慌てて舞子から距離を取る美月の背中が、誰かにぶつかった。それに驚いて体のバランスを崩した美月の両肘を、大きな手が包み込むように支えた。

「失礼」

突然肘に触れた手の感触に身を強張らせると、低く落ち着いた声が耳に降りてきた。低くて、微かに掠れているそれは、耳に優しい。

その声に誘われるように体を捻って相手を見上げると、声の主と目が合った。

背の高い細身の男性が、少し驚いたような表情でこちらを見ている。

「……ごめんなさい」

一瞬、ポカンとした表情で相手を見上げていた美月は、慌てて謝罪の言葉を口にした。咄嗟に声が出なかつたのは、相手の姿に見惚れてしまったからだ。

一步下がりを下げた美月は、吸い寄せられるように眼鏡姿の男性を見つめる。長身の彼は、それほど魅惑的な姿をしていた。

切れ長の目に、スッキリとした高い鼻筋、左目の下に二つある印象的な小さな泣きボクロ。

フレームの細い眼鏡をかけた端正な顔立ちは、一見、理知的で冷たく感じる。だが、その泣きボクロがあることで、どこか艶っぽい印象を与えていた。

「美月、気を付けなきゃ駄目よ。ごめんなさい、この子いつもこうなんです」

慌てて駆け寄ってきた舞子が、そう詫びつつキラキラした眼差しを相手に向ける。

そんな舞子に、彼は薄い唇をゆっくり動かし微笑み、軽く手を上げて離れていく。

その左手首にも、美月たちと同じブレスレットが巻かれていた。

「この街コン、当たりね」

指先で無音の拍手をする舞子は、さつき美月がぶつかった彼をロックオンした様子だ。

そして美月の腕を掴んで軽く体を捻ると、美月にだけ聞こえる声で「向こうも、まんざらじゃないみたいだし」と、囁いた。

どうということかと彼の方へ視線を向けると、まだこちらに視線を向けている。

裾がアシンメトリーになっている黒のサマーニットを着こなし、艶のある黒髪をワックスで無造作に遊ばせている彼は、遠目に見ると非常に均整の取れた体付きをしていた。

細身で背が高く、黒を基調としたファッションに身を包んだ姿は、美しい猟犬を思わせた。痩せているのに華奢なイメージがまったくない。

子供の頃、近所で猟犬を飼っていた人が、犬は対話のできる狼だと話していた。

普段はおとなしく従順だが、狩り場に出て獲物を定めれば、狼の血が色濃く現れる。利口で理性が利く分、その変貌ぶりはある意味狼よりたちが悪いかもしれない。

普段どれだけ従順で紳士的でも、猟犬という生き物は、食欲に獲物に食らいつく荒々しさを持っていることを忘れてはいけないと。

「写真撮りたいの？」

二人で彼に視線を向けていると、背後で声が出た。

振り返ると、癖毛で明るい髪色をした細いつり目の男性が手を差し出している。

「……」

さっきの人が大型の猟犬なら、この人はキツネといった感じだ。

「僕が撮ろうか？」

そう言ってキツネの彼が手を差し出してくる。

「いえ。大丈夫……」

「お願いします」

遠慮する美月の声に、はしゃぐ舞子の声が重なる。

舞子はキツネ目の彼の手に自分のスマホを預けると、美月の腕を引いて壁の前に立ち、ポーズを決める。

二人の写真を数枚撮った彼は、スマホを舞子に返した。

「モデルがいいから、可愛く撮れたよ」

涼しい顔でお世辞を言う彼は、人懐っこい笑みを浮かべて舞子と軽い会話を交わすと、にこやかに手を振り離れていく。

そんな彼の手首にも、ブレスレットが巻かれている。

二人から離れたキツネ目の彼は、さつき美月がぶつかった獵犬のような男性と合流して奥の方へと消えていった。

「なんだ、あの人を待ってたのか……」

自分に気があると思っていたらしい舞子が、不満げに唇を尖らせた。でもすぐに気持ちを切り替えた様子で、撮ってもらったばかりの写真をスマホでチェックしている。

「まあいいわ。イイ男は他にもいそうだし」

写真をチェックし終えた舞子は、会場に入っていく参加者へ顔を向けた。

その視線は、男性だけでなく女性にも向けられている。しばらく人の流れを眺めていた舞子は、

強気な表情で頷く。

「そうだね。舞子は昔からモテるもんね」

それは嫌味や妬みではなく、まごうことなき事実だ。

美人で明るくお洒落な舞子は、学生時代から異性にモテていた。

自然と零れた美月の言葉に、舞子は当然と言いたげに頷くと、スマホをしまつてレストランの中へ向かう。

過去の経験から、こういった場所での自分は、間違いなく舞子の引き立て役にされてしまうだろう。

確かにこういった場所での出会いは求めているのだけど、せっかくの休日の過ごし方として、

それはさすがに虚しい。

「なにしてるの？ 早く行くわよ」

なかなか足を動かさない美月に、舞子が声をかける。

わくわくした感情が溢れた眼差しで自分を待つ舞子を、いつまでも待たせるのも悪い。

舞子に連れ出されない限り、自分がこういった場所に出かけることはないのだから、とりあえず美味い料理だけでも楽しもう。

そう納得して、美月は歩き出した。

「……ええ、私は大手企業の受付をしていて、こっちの美月は小さな印刷デザイン会社に勤めているんです。タイプが全然違う？ よく言われます。美月キツそうに見えるけど、話すとき良い子なんですよ。……出会いは？ 地元の高校が一緒だったんです。大学は違うんですけど、同じ都内だったから、ずっと仲良しで……」

今日何回目かになる二人の概要を、舞子が饒舌に語っていく。

街コン開催の挨拶が終わった後、まずは十分ずつのトークタイムが割り振られ、色々な男性と会話をしていく。それを一時間ほど繰り返した後は、自由時間となり、気の合った人と一緒に施設内を回るもよし、自由に散策した先でブレスレットを巻いた人と話を楽しむのもよしといった感じだ。そして最後に会場であるレストランに戻り、閉会の挨拶と共に、気になる相手と連絡先を交換するらしいのだけど、既に多くの人が、最初のトークタイムで気に入った人と連絡先の交換をしているようだ。

舞子も当然、気に入った人と連絡先の交換をしていくが、そのやり取りに美月が加わることはない。

舞子に気がある男性が、ついとといった感じで美月にも連絡先を聞いてくることがあったが、美月が断るとそれ以上聞いてくることはなかった。

舞子の手前、一応は連絡先を聞いたが、期待されても迷惑ということなのだろう。

会場で出されたオードブルや飲み物はとても美味しかったので、舞子の添え物扱いである現状は

気にしないでおく。

積極的に会話に参加することもなく、社交の範囲で笑みを浮かべて、周囲に視線を向ける。すると、レストランの入り口で会った男性たちを見つけた。

見るからに遊んでいそうなキツネ目の彼と、艶のある色気を漂わせる猟犬っぽい彼という二人組みは、華やかで人目を引く。

運良く彼らと同じ席になった女子は、目をキラキラさせながら積極的に話しかけている。そんな女子たちを、キツネ目の彼が上手くあしらっているようだ。対して猟犬の彼は、自分から会話に参加している感じはなく、キツネ目の彼に話しかけられて相槌を打つ程度だ。

そんな気のない対応でも、彼がやると憂いのある仕草に見えるから、美形というのはそれだけで得なのだろう。

「印刷会社って、どんな仕事をするの？」

不意に話しかけられ、美月は視線を前に戻した。

あちらの二人とは趣の違うイケメンが、美月に人懐っこい微笑みを向けてくる。

「えっと……」

「美月は、印刷会社で雑用係してるの。本当に小さな会社で、名刺や商店街のチラシの印刷程度の仕事ばかりで……」

壁の花的ポジションに慣れている美月は、一瞬自分が話しかけられていることに気付かなかった。

その隙に舞子が話し始めるのは、証券マンだと語った彼の容姿が舞子好みだからだろう。

証券マンだという彼は、華やかな微笑みを浮かべた舞子の言葉を途中で遮る。

「なんで君が喋るの？」

そう言いつつ、さりげなく自分の手を美月のそれに重ねてくる。

「俺は、美月ちゃんの口から話を聞きたいんだけど」

「……」

舞子好みの容姿とはつまり、わかりやすいイケメンということだ。

そんな彼に手を重ねられて甘く微笑まれたら、それだけで頬が熱くなる。

素敵な男性が冴えない自分に興味を示す。そんな少女漫画のような展開に驚きながら受け答えしている、舞子の眉が微かに歪む。

みるみる不機嫌になっていく舞子を気にしつつ、証券マンの彼と会話していると、あつという間に時間が過ぎていった。

そして話し相手を変えるタイミングで、証券マンの彼がスマホを取り出す。

話が弾んだので、連絡先を交換していいかな……そんな流れを想定して、美月がスマホを取り出すとすると、証券マンの彼は美月ではなく舞子にスマホを差し出した。

「ちつとも話せなかったから、舞子ちゃんの連絡先を教えてよ。今度は二人だけで食事に行こう」

「……」

スマホを取り出そうとしていた美月の手が止まる。それと同時に、舞子の顔に勝者の笑みが浮かんだ。

「美月、いいように利用されちゃったね」

証券マンの背中を見送りながら、彼との予定をスマホのカレンダーに書き込む舞子が笑う。

「え？」

なにが起きたのか理解できず目を丸くしている美月に、舞子が言う。

「彼、私の関心を引くために、美月とばかり話してたのよ」

その方が舞子の印象に残り、彼女の連絡先を聞き出したり、会う約束を取りつけやすくなったりするのだそうだ。

「合コンでは使い古された手だけど、私の気を引くために必死な様子が可愛かったから、彼の誘いに乗ってあげることにしたのよ」

「なるほど……」

そういうことかと納得すると同時に、一瞬でも期待してしまった自分が恥ずかしくなる。

——いい年をして、少女漫画のような展開に期待してバカみたい……

さつきとは違う意味で熱くなる頬を押さえていると、向かいに新たに人が座る気配がした。

甘さを含んだ爽やかな香りに顔を上げたら、キツネ目の彼と獺犬っぽい彼が目の前にいた。

さつきは気が付かなかったが、二人のうちのどちらかが品のよい香水を使用しているらしい。

「悪い男もいるもんだね」

キツネ目の彼が、細い目をさらに細くして癖のある笑みを浮かべた。

そうしながら美月とさっきの証券マンの姿を見比べる。その視線の動きで、先ほどのやり取りを見られていたのだとわかった。

見られていたという事実と、隣で舞子がクスリと笑う声に美月の羞恥心が煽られる。

「よろしく。僕は宮島涼で、こっちは榎波優斗」

軽い口調で自己紹介してくるのは、キツネ目の彼だ。対して猟犬の彼は、涼と名乗ったキツネ目の彼の言葉に合わせて、軽く首を動かすことで挨拶を済ませた。

「はじめまして私は……」

声のトーンを高くして、舞子がテンプレートな二人分の自己紹介を始める。

舞子は目の前の二人が気に入っているようだし、少なくとも涼の方はこういった場所を楽しむタイプに見えるので、舞子を相手に話を盛り上げてくれるだろう。

「ちよっとごめんね」

さっきの出来事から気持ち切り替えられずにいた美月は、自分がいなくても問題ないだろうとお手洗いを口実に席を立つ。

そのまま会場から抜け出そうとしたら、誰かに腕を掴まれた。

驚いて振り返ると、榎波優斗と紹介された猟犬っぽい彼が、席から立ち上がった美月の腕を掴ん

でいた。

「あの……?」

自分になんの用だろうと怪訝な顔をする美月に、優斗が言う。

「君の連絡先を覚えてくれないか?」

その言葉に、美月はまたかと肩を落とした。

少女漫画じゃないんだから、こんなイケメンが自分に興味を持つわけがない。それはさっき実感したばかりだ。

舞子の引き立て役にされることには慣れているけど、立て続けに二度もとなると、さすがに心が軋んで泣きたくなる。

「そういう遠回りなことをしないで、直接舞子に連絡先を聞いたらいいと思いますよ」
きつと舞子も喜んで連絡先を覚えてくれることだろう。

だけど優斗は、軽く肩をすくめて首を横に振る。

「俺が知りたいのは、阿部さんの連絡先でなく、君の連絡先だけだ」

舞子を苗字で呼ぶ優斗は、もう一方の手でスマホを取り出し、美月に差し出してくる。

微かに距離が縮まったことで、さっき感じた甘く爽やかな香りの主が優斗だとわかった。

これはどういう状況だろうと考えていると、美月の代わりに舞子が口を開いた。

「美月はこういうことに慣れてないから、からかわないであげてください。連絡先を聞かれるだけ

でも、舞い上がっちゃうんだから」

他人に言われるとなんとも痛い話だが、事実なので否定のしようもない。

もう勘弁してほしいと優斗の手を無言で振り解こうと腕を動かした。だけど優斗が腕を離してく
れる気配はなく、美月に視線を向けて言う。

「からかってなんかいない。本当に君の連絡先が知りたいだけだよ」

チラリと視線を向けると、舞子は目をまん丸にして驚いているし、涼は頬杖をついてニヤニヤし
ている。でも美月の腕を掴む優斗の表情は真面目で、からかっている感じはない。

「あの……」

「知ってどうするの？ 連絡する気もないのに聞くとか、可哀想だからやめてあげて。この子は、
全然モテなくて、少女趣味な妄想ばかりしてるイタイ子なんですよ」

舞子が、優しい声色で優斗を諭した。

連絡が来ないことを前提に、酷いことを言われている気がするが、概ね間違っ
てはいない。彼のような男性に連絡先を聞かれたら、舞い上がって連絡が来るのを待ち続けそう
だ。

「君が俺のなにを知っている？ 俺は彼女を食事に誘いたいと思っ
ている。もちろん、俺が誘うこ
とが迷惑じゃなかったらだけだ」

余裕に満ちた表情でウインクする優斗を見て、舞子の頬が微かに痙攣した。

そんな三人の顔を順繰りに観察した涼は、もともと手にしていたグラスの飲み物を舐めるように

含んで口を開く。

「今日の街コンで、コイツが女の子の連絡先を聞いたのは美月ちゃんが初めてだよ。このまま手ぶ
らで帰るのは可哀想だから、好みじゃないかもしれないけど、お情けで教えてやってよ」

こんな漫画みたいな展開あり得ない。

舞子がグッと奥歯を噛みしめ眉間に皺を寄せる。そんな彼女と極上のイケメンを見比べながら、
美月はただ目を丸くするのだった。

2 夢の時間の終わりには

日曜日の昼下がり。

待ち合わせの時間を前に、美月はショーウィンドウに映る自分の姿を確認する。

先週の街コンでは、買い物に行くつもりでいたので動きやすさ重視のカジュアルな服装をしてい
た。それに比べると、今日の自分は、少しは女子っぽい装いをしていると思う。

落ち着いた桜色のフレアスカートに白のニット、その上にデニム素材のジャケットを羽織った今
日の服装は、我ながら可愛い仕上がりになったと思う。

待ち合わせの駅で、ショーウィンドウを鏡代わりに服装をチェックしていた美月は、待ち合わせ

していた人が来たことに気付いて視線を向けた。

「可愛いけど、ちよつと無理してる感が出ちゃってるかも。美月ってピンクのイメージないし」

美月としては、ほどよいお洒落をしたつもりだが、待ち合わせ場所に現れた舞子に、開口一番駄目出しをされてしまった。

「変かな……」

急に不安になり、美月は腰を捻^{ひね}って自分の姿を確認した。

舞子も、人さし指を唇に添えて角度を変えながら美月を観察してくる。

「私の場合、いつもの飾らない感じの美月を見慣れているから、そう感じちゃうだけかも」

美月のジャケットやスカートを摘まんで動きを付けてくる舞子は、そう締めくくって服から指を離した。

そして「大丈夫」と伝えるように、大きく頷く。

「よかった」

ホッと胸を撫で下ろす美月を見て、舞子が指先を唇に戻して軽く首をかしげて微笑む。

「あとは、榎波さんが来ることを祈るばかりね」

そう言うと、舞子は美月の肘を掴^{つか}み、急^せかすように軽く引っぱって歩き出す。

その言葉に曖^{あい}昧^{まい}な微笑みを浮かべ、舞子に続いた。

今日の本当の待ち合わせ相手は舞子ではなく、先週街コンで出会った榎波優斗だ。

あの日、連絡先を聞いてきた優斗は、茶化す涼や、遊びならやめてほしいと釘を刺す舞子を見無視して、本当に美月にデートの約束を取り付けてきた。

その結果として、美月はこの後、優斗とデートすることになっている。

そのデートの待ち合わせに、何故舞子が一緒に行くのかと言えば、美月を心配してのことらしい。舞子の言い分としては、あの場所で美月に興味を持った優斗だが、別れた後、急にその思いが冷めて約束をすっぱかす可能性が高いのだとか。

それを心配した舞子が、待ち合わせ場所についていくと言い出したのだ。

「もしすっぱかされたら、私が付き合っただけから」

明るい口調で語る舞子だが、待ち合わせのカフェが見えてくると、彼女の心配が杞^き憂^{ゆう}で済んだことがわかった。

優斗が、通りからよく見えるテラス席に腰掛けている。

「よかった」

思わず零れた美月の声で、優斗の姿に気付いた舞子が足を止めた。

心配してついてきてくれた舞子には悪いけれど、すっぱかされなかったことにホッとする。

「舞子、ここまで付き合っただけありがとう」

お礼を言う美月に、舞子が明るい口調で言う。

「せっかくだから、私も挨拶^{あいさつ}して帰るね」

「え……あ、うん……」

友達同伴でデートの待ち合わせに現れるというのは、相手に変に思われまいだろうか。しかし、舞子は止める間もなく、美月をその場に残して優斗のもとへ駆け寄っていつてしまう。

「やあ」

テラス席に駆け寄る舞子と美月に気付いた優斗は、読んでいた本を閉じて笑みを浮かべた。

今日の彼は、眼鏡をしていない。コンタクトレンズなのだろうか、そんなことを思いつつ美月も歩み寄ると、先に辿り着いた舞子が口を開く。

「こんにちは。美月が、一人で行くのはどうしても嫌だって言うからついてきたんです」

——え？

事実と異なる説明に美月が目を丸くしている間に、舞子は当然のように優斗の向かいの椅子に座る。

優斗の使っているテーブルには、二人分の椅子しかセットされていない。この場合、スタッフに頼んでもう一脚椅子を持ってきてもらった方がいいのだろうか。

——でも、この小さなテーブルに三脚も椅子を置いたら、他の人の迷惑になるかも……

迷いながらスタッフを探して周囲を見渡していると、舞子が美月の服の袖を掴んだ。

「やだ美月、服が汚れてるわよ」

「えっ？」

驚いて舞子の指摘するところを確認すると、ジャケットの袖口にラメが含まれたピンク色の筋がついている。

「ほら、ここも。ここにも」

汚れは袖口だけでなく、スカートの裾やジャケットの肘や腰回りにもついていた。

「そんな……」

せっかく自分なりにお洒落してきたのにと、泣きたい気分になる。

汚れた服のままデートに行くのも失礼な気がして、どうしたものかと優斗を見た。すると、優斗は無言で読んでいた本を鞆にしまい、財布を取り出して出している。

「私が榎波さんと待っててあげるから、着替えてきたら？」

「……そうだね」

見かねた舞子が出してくれた提案に乗りかけた時、優斗が「もういいよ」と言っつて、立ち上がった。

「着替えが必要なら、俺と一緒に買いに行けばいい」

優斗はテーブルに千円札を二枚置き、その上に自分の使っていたカップを置くと、軽く体を屈めて舞子に顔を近付ける。

「あの……」

突然顔を寄せられた舞子が、頬を紅潮させて、はにかんだ笑みを浮かべた。

口角を綺麗に持ち上げ可愛らしく微笑む舞子と見つめ合うこと数秒、納得したと言いたげに優斗が顎を動かした。

「彼女の服の汚れは、君の口紅の色によく似ているね」

「……っ」

その言葉に、舞子が目を見開いた。でもすぐに、なにを言っているかわからないと言いたげに微笑む。だが、その笑みは、さっきまでと違ってぎこちない。

そういえば、さっき舞子がやたらと自分の服を触っていたことを思い出す。

「偶然ついちゃったのかな？ ごめんね、美月」

「ううん。私も気付かなかった」

「どっちにしろ、着替えてきた方が……」

「付き添いがありがとう。せっかくだし、君はここでなにか好きな物を飲んで帰ってくれ」

そう言うのと優斗は美月の手を引いて歩き出した。

カフェから美月を連れ出しながら、優斗は自然な動きで美月の腰に腕を回し寄り添う。

「あの……っ」

恋人同士のような親密すぎる距離に戸惑っていると、優斗がその理由を口にした。

「少しだけ我慢して。こうした方が、汚れが目立たないから」

なるほどと納得するが、体が密着していることで、彼の体温や纏う香水の香りをすぐ側に感じて

緊張してしまう。

焦って視線を彷徨わせると、立ち上がった姿勢でこちらを睨む舞子と目が合った。

不機嫌そうな舞子が気になるが、優斗にリードされているため声をかけるタイミングを逃してしまった。

「あの、さっき舞子が私の服装をチェックしてくれたから、その時にリップがついたんだと思います。彼女、慣れない私を気にかけてくれて、心配してここまでついてきてくれたので」

今日の舞子の行動には、確かに違和感がある。でも、自分を心配してくれたのは事実だと思うので、あまり悪意を持った捉え方はしたくない。

舞子を気遣う美月の言葉に、しばし考えて優斗が同意する。

「……そうだね」

その間はなんだろうと、優斗の顔を見上げた。

「君はもっと、人の言葉より、自分の感情を信じた方がいい」

「え？」

意味がわからないと首をかしげる美月に、優斗は困ったように肩をすくめる。

「たとえば、相手の言動を不快に感じた時、友達だからと自分の感情を呑み込む必要はない。感情は君のものなんだから」

そう言うって優斗が優しく微笑む。

遠目にも綺麗な顔立ちをしていると思ったけど、間近で見たら、目鼻立ちの美しさはもちろん、肌の美しさにも目がいく。

なんだか本当に少女漫画の王子様のような。そのせいなのか、普段は相手と気まづくなりたくなくて呑み込んでしまう気持ちを、口に出してもいい気がした。

「舞子に悪意がなかったとしても、服が汚れたのは悲しいです」

「そうだね」

頷いた優斗が、優しい口調で言葉を重ねた。

「その服は、君によく似合っていた。今日のデートのために、せっかく可愛くしてきてくれたのに、残念だよ」

「ピンク、変じゃないですか？」

さっき舞子に指摘されたことが気になり、つい、そんな疑問が口をついて出てしまう。

「和倉さんは、色が白くて大きな目がチャーミングだから、ピンクが映えるよ」

臆面もなく甘い台詞を返されて、美月は耳まで熱くなる。

降って湧いた夢みたいな展開に、頭が上手く働かない。

——こういうことは、舞子みたいな可愛い女の子にしか訪れないと思ってた。

「美月ちゃんって、呼んでいい？」

ポカンとした表情で見上げる美月に、優斗がそう確認してきた。

慌てて頷くと、優斗が嬉しそうに目を細める。そんな顔をされると、美月の鼓動がさらに加速してしまう。

「とりあえず服を買ったら、食事に行こう。それでいい？」

そう確認され、美月は首を大きく縦に動かすことしかできなかった。

カフェの近くにあったセレクトショップに入り、優斗は美月に服を選んでくれた。パンプスとバッグはそのまま使えるようにと優斗が選んでくれた服は、手触りがよく柔らかな素材のワンピース。色合いは最初に穿いていたスカートと似ているが、デザインは元のスカートより裾が広がり、腰のくびれを強調している。

その上に白いジャケットを羽織ると、もともと美月が着てきた服以上に、可愛らしい印象になった気がした。

「どうですか？」

あまりに普段の自分らしからぬ服装に、不安な気持ちを抱えてフィッティングルームから出る。

優斗は目を細めて穏やかに頷いてくれた。

自分の格好を全肯定してくれる彼の顔を見たら、不安が一気に吹き飛んでいく。

優斗の言動一つ一つに心が反応して、お酒を飲んだわけでもないのに、頭がフワフワして酔っているみたいだ。

「行こうか」

フィッティングルームから出た美月に、優斗が手を差し出す。

「あ、その前に、支払いを」

このまま着ていくのでと、試着する前に値札だけ外してもらったが、支払いはまだ済ませていない。

慌てて財布を取り出そうとする美月に、優斗が言う。

「支払いは済ませておいたよ」

「……？」

意味がわからずキョトンとする美月に、優斗が微笑む。

「今日の記念に、俺からプレゼントさせて」

優斗は涼しい顔で伝えてくるが、美月としては焦るばかりだ。

「そんなわけには……」

今からでも自分で支払いを……と、バッグの中の財布を探していると、店員さんから、もともと
の服が入った紙袋を丁寧な所作で差し出されてしまった。

当たり前のように優斗が受け取ろうとするので、慌ててそれを受け取る。

その隙に、優斗は店員にお礼を言っ、美月の手を引いて歩き出してしまった。

さらに店を出たところで、さりげなく美月から荷物を取り上げてしまう。

「あの、お金、払います」

「プレゼントだから駄目だよ」

美月を見る優斗は、悪戯いんずらを楽しむ少年のような顔をしている。

そんな彼に、気分を害するようなことを言っ嫌われたくない。

どうしたものかと悩んでいる間に、優斗が美月を駐車場へと案内した。

そこに停めてあった車を見て、再び美月は目を丸くする。

立ち止まった美月に気付き、優斗がしまったといった顔をした。

「ごめん。出会ったばかりの男の車に乗るのはマズイか」

申し訳ないと、優斗が前髪を掻き上げて眉尻を下げる。

「いえ。そういうことは……」

もちろん美月だって、普段なら出会ってすぐの男の人の車に乗るなんて不用意なことはいらない。

でも、ここまでの出来事を通して彼のことは信用してもいいと思っていた。

視線で問いかけてくる優斗に、美月は目の前の車を見る。

滑らかな流線型をした黒い車体は美しく、車に詳しくない美月でも高級車なのだとわかった。

「榎波さんは、何者ですか？」

この前の街コンの時もそうだが、今日も優斗は洒落っ気と遊び心を併せ持ったデザインの服を上
手に着こなしている。それに、腕時計や靴といった小物からも、こだわりと高級さを感じた。

これらを揃えるにはそれ相応の金額が必要になるであろうことは、容易に想像できる。

「ああ、そういえば、街コンの時、きちんと自己紹介をしていなかったね……」

——そういう意味ではなかったのだが……

車の電子ロックを解除した優斗は、助手席のドアを開けて優しく美月を座席へ誘導する。

そして名刺入れから紙片を一枚取り出して美月に渡すと、運転席に移動していった。

「カンナミグループ、カンナミ建設、未来街造り部……榎波優斗……さん」

差し出された名刺の表には、社名と所属部署の下に彼の名前が書かれている。

裏返すと、カンナミグループの系列企業の名前が日本語と英語と中国語で列挙されていた。

つまり外国でも仕事をしているということだ。

カンナミグループといえば、ゼネコンの代表格であり、いわゆるスーパーゼネコンと呼ばれる大企業の一つだ。

名刺には、所属部署は書かれているが、これといった肩書きはない。

彼は若そうに見えるが、三十代前半といったところだろう。大企業なら、その年齢で肩書きがないのも不思議はない。

「念のため、免許証も確認する？」

両手で受け取った名刺をまじまじと眺める美月に、運転席に乗り込んだ優斗が、からかうように言う。

「いいです。ただ……」

当然のように美月の服の支払いをし、高級車に乗る彼を見て、本当に王子様ではないのかと思っ
てしまった自分が恥ずかしくなった。それと同時に……

「ただ？」

頭に浮かんだ言葉をそのまま口にしようとして慌てて呑み込んだ美月に、優斗が言葉を促す。

甘く艶やかな表情に見つめられ、判断力が低下した美月は、うっかり呑み込んだ言葉を口にして
しまう。

「大手企業の社員さんだとしても、なんかお金持ち感が過ぎるというか……だから、やっぱりさつ
きの洋服代は、ちゃんと自分で払わせてください」

優斗の方が美月より稼いでいるのは確かだろう。

それでも高級車や、洒落た服や小物を揃えるにはそれなりに出費もあるということだ。だったら、
懐事情は苦しいのではないか、と心配になった。

「……」

美月の言葉に、優斗の表情が固まった。

「す、すみません……余計なことをっ」

せっかくの好意に対して、こんな不躰な発言をしてしまい、相手の気分を害してしまったのでは
ないかと不安になる。

だが、このまま知らん顔をするわけにもいかない。

緊張しつつ見つめ合うこと数秒、状況を呑み込んだといった感じで優斗が頷く。

「そういうことか。変に気を遣わせて悪かった」

クシャリと前髪を掻き上げる優斗は、次の瞬間、フツと表情を緩ませる。

「確かに収入はそこそこかもしれないけど、実家暮らしで生活費がかからないんだ。それに車は、デートだからと言って、家族のものを借りてきた。普段の交通手段は電車だよ」

「ああ……」

なるほどと納得しつつ、つい余計なことを口にしてしまう。

「それなら、私に使った分は、家の人にお土産を買って帰ってはどうか？」

「……？」

「なんて言うか、家賃や食費がかからないのって、すごく助かりますよね。でも実家にいると、それが当たり前になって、感謝とか忘れがちになるから……余計なことだったらすみません」

口にしてから、ひどく差し出がましい意見だったかもしれないと気付き、慌てて言葉を補足する。「私、地方出身で、大学進学をする時に親元を離れたんです。親元を離れて初めて、毎日の家事の大変さに気付いて母に感謝しました。そして、社会人として自分の稼いだお金で生活するようになって、父の大変さを知ってやっぱり感謝して……。そういうことって、一緒に住んでる時はなかなか気付けないことだから……。それで、たまに両親へ美味しいものを送るようにしたんですけど、

すごく喜んでくれて……だから、あの……」

途中から自分でもなにを言いたいのかわからなくなり、しどろもどろになってしまう。

そんな美月の姿に、優斗は「プレゼントを贈った女性に、そんなことを言われたのは初めてだ」と、笑う。

男の人は、うるさく正論を説く女性が嫌いだと聞く。

しかも年下の自分が、偉そうなことを言って呆れられただろうか。焦る美月に優斗が言う。

「確かに美月ちゃんの言うとおりだ。家族に与えてもらうことに慣れて、感謝することを忘れていたかもしれない」

不快に思っている様子のない声に安堵して視線を向けると、優斗がクシャリと微笑んだ。

人の良さを感じさせるその微笑みに、美月の顔にも自然と笑みが浮かぶ。

ではと、鞆から財布を出そうとする美月を、優斗が制した。

「ありがたく君のアドバイスには従う。でも今日の記念に、プレゼントはそのままにさせてほしい。その代わり、次に会った時にお茶をご馳走してくれる？」

「えっ……とっ」

それはつまり、また会おうと美月を誘っているのだろうか。

彼の言葉を理解して赤面する美月に、「約束だ」と軽くウインクして、優斗は車を発進させた。

普段は電車で移動すると話した優斗だが、その運転は危なげなく、混雑する都心の道をスムーズ

に進んでいく。

カーナビを使用することなく車を運転する優斗は、美月の知らない場所で停車した。

「ここは、植物園？」

広い駐車場の前にウッドデッキがあり、その先に北歐風の建物と、それに寄り添うような温室らしき建物が見える。

「惜しい。園芸ショップだよ」

「なんだかすぐくお洒落ですね」

女子ウケしそうな外観について目が行ってしまう。

美月が関心を示すことは織り込み済みといった感じで、優斗が頷く。

「カフェも併設されているから時間潰しにいいと思って。この前、植物に興味がありそうだったから」

そう言っつて、優斗はシートベルトを外して車を降りた。

優斗が言っているのは、街コンが始まる前に、美月が彼とぶつかった時のことだろうか。

だとしたら優斗は、あんな一瞬のことを覚えていたということになる。

助手席側に回った優斗は、ドアを開けると美月に手を差し出した。

「その後は、近くの店に予約をしているから、食事に行こう」

自分は壮大な夢でも見ているのだろうか……

見目麗しく紳士的な男性に、お姫様のような扱いを受ける。少女漫画を読みながら、そんなチューエーションを幾度となく夢見てきた。

だけど、いざそれが現実になると、どう反応していいかわからない。

「残念ながら、明日は仕事で朝早くから現場視察があるんだ。だから食事したら、家まで送らせてもらうよ」

差し出された手をなかなか掴まない美月に、優斗が片眉を上げからかうように言う。

「その先がなくてごめんね」

まるで、美月がその先を期待しているように言われて、恥ずかしくなる。

「そんなこと、期待してませんっ」

「そう。残念」

全力で否定する美月をクスリと笑い、優斗は彼女の手首を掴んで引き寄せた。

手を引かれる形で美月が車を降りると「行こう」と、美月の手を引き、園芸ショップへ向かう。

「榎波さんは、前にもここに来たことがあるんですか？」

「可愛い外観は、あまり男性が一人で来る場所とは思えない。」

自分にそんな権利はないと重々承知しているのに、探るような響きになってしまう。

「実はここ、カンナミグループが企業戦略の一環として協賛している店なんだ」

「え？ 大手企業は、家を建てるための木材から育てるんですか？」

美月の言葉を聞いて、優斗が面白そうに笑う。

「確かに森林資源の保護にも力を入れているが、こういうテナントに求めているのは、利用者の反応だよ」

「……？」

柱や梁を上手くいかした店内の内装は、白い漆喰塗りで植物の緑が映える。品良く植物の配置された店内を並んで歩く。

「この店では、定期的に多肉植物の寄せ植えや、ドライフラワーのリース作りといったワークショップを開いている。参加者は女性が多い。企業としては、彼女たちの様々な反応を通して、女性により好まれる住宅デザインの市場調査をしているんだ。家を建てる際、デザインを決めるのは女性というケースは多いからね」

「なるほど……」

言わんとすることは、なんとなくわかる。

美月の実家をリフォームした際も、母はあれこれ父に相談をしていたが、結局、床の木材の種類や壁紙の色は母の希望どおりになっていた。

「君と会った街コン会場の商業施設も、カンナミの事業の一環。有名建築家と期間限定でコラボをしていて、色々なイベントを予定しているんだ。先日の街コンもその一つ。そのプロジェクトと一緒に進めている宮島に誘われて、あの日は仕事を兼ねて参加していたんだ」

高い位置から垂れ下がる鳶を指で弾く優斗は、苦い顔をする。

察するに、仕事を口実に街コンに誘い出されたが、さしたる収穫もなく退屈をしていたのだろう。ただ、怒っている感じはないので、タイプは違うが、宮島とは普段から仲良くしているのが察せられた。

「あの商業施設、リニューアルするんですよね」

舞子からそのような話を聞いた。緑が多く開放的な施設を思い出すと、変えてしまうのは勿体ない気がする。

「ずっと同じなんて、つまらないだろう？」

強気な口調の優斗には、この先のビジョンが見えているのかもしれない。挑戦的な表情で、なにかを見据えて呟いた。

「新陳代謝していかないと、新参者の座る場所がない」

「……？」

それはどういう意味だろうかと考えている間に、優斗が話題を変える。

「美月ちゃんは、どんな仕事をしているの？」

「私は小さな印刷デザインの中で雑用係をして……」

深く考えず、そう口にした美月の手を、優斗が強引に引いた。

「それは、美月ちゃんの友達の印象だろ？」

「……？」

キョトンとする美月に、優斗が困ったようにそつと目尻に皺を寄せた。

「街コンの時に、美月ちゃんの仕事のことを、そう説明していただろ。たぶん彼女は、仕事場での美月ちゃんを知っているわけじゃない。そんな人の言葉じゃなく、美月ちゃんが自分の仕事をどう思っているかが知りたい」

優斗に言われて、美月は自分の中の言葉を探す。

確かに「小さな印刷会社の雑用」という表現は、合コンなどの席で舞子が美月を紹介する時に使う言葉だ。それで周囲は納得していたし、それ以上の説明を求められることもなかった。

けれど優斗は、美月の考えを聞きたいと言ってくれているのだから、ちゃんと考えて返したい。

「私が勤めているのは小さな印刷会社で、いつも人手不足の感はあるんですけど、活気があつて色々な仕事に参加させてもらえます」

小さな会社で毎年求人をしているわけではないため、入社三年目の美月はまだまだ新人扱いだ。

現在の所属は営業だが、営業職とは関係のない雑用を頼まれることも多い。

その分、部署を超えて意見を求められることもあり、少し前にも、商店街のイベントチラシについて意見を求められそのまま採用された。

そんなことを話しながら、二人並んで色々な鉢植えを觀賞していく。

美月は今まで、誰かに自分の仕事について話したことはなかった。だからつい、饒舌になつてし

まう。話しすぎているだろうかと不安になつて優斗を見ると、優しく見つめ返される。

「楽しんで仕事ができるのは、幸せなことだよ。友達の言葉に囚われて、自分を卑下する必要なんてない」

優斗の言葉に、美月の心が解れる。

もともと会社の仕事は好きだった。だが、舞子と話すうちに、薄給で雑用をこなすだけの自分は恥ずかしいのだと思ひ込んでいた。

心が解れたことで、自然と表情が明るくなった美月を見て、優斗が言葉を重ねる。

「人によって、ものの価値観が違うことはたくさんある。たとえ友人の言葉でも、鵜呑みにしない方がいい」

人によって違うものの価値観……。舞子と接していると、時々どうしようもなく息苦しさを感じるのは、そういうことなのだろうか。

「……はい」

美月が頷くと、優斗も軽く頷き彼女の手を引いて店内を散策する。

「美月ちゃんは、植物が好きなの？」

「そうですね。実家が農家なので、植物には親しみがあります」

同じく農家の娘である舞子はその話を避けるため、自然と口にするのがなくなつたが、こうして植物に囲まれていると、自分のバックグラウンドを実感する。

優斗は美月の話にも、楽しそうに耳を傾けてくれる。

そんな彼の横顔を見ると、心がそわそわして落ち着かない。

そんなくすぐったく騒ぐ自分の気持ちを落ち着かせようと視線を巡らせ、ふと小さな鉢に寄せ植えされている多肉植物が目にとまった。

「買う？」

美月の視線を追いかけ、優斗が問いかける。

「そうですね。今日の記念に買おうかな」

ブリキ缶の鉢に、可愛く数種類の多肉植物が寄せ植えされている。多肉植物はあまり手がからないと聞くので、部屋に置くのもいいかもしれない。

鉢を手にとろうとすると、一足早く優斗がそれを持ち上げた。

「記念にするなら、俺が買うよ」

「でも……」

それでは申し訳ないと慌てる美月に、優斗は近くにあった鉢をもう一つ持ち上げ彼女の前に差し出す。

「代わりに美月ちゃんは俺にこれを買って。そうしたらお互いの記念になる」

受け取った鉢は自分が見ていた鉢より一回り小さく、寄せ植えされた植物の数が少なく苗も小さい。一目で、優斗の持つ鉢より値段が安いものだとわかる。

それでもお互いの記念にと言われると断れず、美月は差し出された鉢を受け取った。

美月が鉢を受け取ると、優斗は会計を済ませてカフェでお茶を飲もうと提案する。その提案にり、レジで支払いを済ませると、先に会計を済ませていた優斗が鉢を美月に差し出す。

「はい。今日の記念に」

そう言うて手渡される紙袋の中を覗くと、ご丁寧に簡易的なラッピングまでされている。

こんなふうに女性扱いされることに慣れていない美月には、優斗の気配りが恥ずかしくてくすぐったい。

「ありがとうございます。……これ。ラッピングしてないんですけど」

自分の気配りの足りなさを詫びつつ紙袋を差し出すと、優斗が蕩けるように微笑む。

「リボンは女の子の特権でしょ」

だからこのままでいいのだと、優斗は美月の差し出す紙袋を嬉しそうに受け取った。

カフェがセルフシステムのため、美月を席に座らせると、優斗は二人分の飲み物を買うためにカウンターへと向かう。

その後ろ姿を見送った美月は、少し気持ちを落ち着かせようと、鞆から取り出したスマホを確認した。

「——えっ？」

画面を開くと、舞子からおびただしい量のメッセージが届いている。

その数に驚き内容を確認すると、優斗のことは疑ってかかるべきだといった文言が並んでいた。女性の扱いに慣れた様子の優斗は、きつと遊び慣れていて美月の手に負える相手ではない。

さつき舞子を冷たくあしらったのも、舞子の気を引くためで、遊び慣れた男がよく使う手だとこの間学んではずだ。

もしくは、結婚詐欺かもしれない。そうでないと優斗のような男性が、美月に近付くはずがない。痛い目に遭う前に、彼と関わるのはやめた方がいい。

美月が傷付く姿は見たくないから、優斗のことは諦める。

その代わり美月に似合う人を、自分が探してあげる。

そんなことが延々と書かれていた。

「……」

心配を装ったネガティブな言葉の羅列に、一瞬で冷水を浴びせられた気分になってしまふ。

指先が冷たくなるのを感じながらカウンターへ視線を向けると、飲み物が準備されるのを待つ優斗がアイコンタクトを送ってくる。

その茶目つ気たっぷりな表情は、やっぱり少女漫画の王子様のようだ。

さつきまで、そんな彼に優しくされて夢心地でいたけれど、舞子のメッセージを見た後だと素直に喜ぶことができなくなる。

「なんか、難しい顔をしてるね」

自分の前にブラックコーヒー、美月の前にミルクティーを置いた優斗が、テーブルを挟んだ向かいに腰を下ろす。

「……ちよつと、色々考えていました」

「例えば？」

美月の表情の変化に目ざとく気付いた優斗が、じつと視線を向けてくる。

なんとなく、適当に言葉を濁すのは不誠実な気がした。それに、舞子の言葉を嚥呑みにして、この時間を楽しめなくなるのは勿体ない。

「……あの日、榎波さんは、どうして私の連絡先を聞いたのかなど」

「なんだか唐突だね……」

困ったように苦笑する優斗に、美月は密かに気になっていた疑問を口にする。

「会場には、私より可愛い人も綺麗な人もたくさんいて、皆、榎波さんと仲良くしたがっていません。その人たちじゃなく、どうして私だったんですか？」

湧き上がってくる不安を上手く抑える術を持たない美月の表情は、よほど切羽詰まったものだったのだろう。

少し面食らった様子で瞬きした優斗は、顎に指を添え、考えをまとめるように虚空を見上げた。そして、美月に視線を戻した彼は、どこか困った顔で口を開く。

「美月ちゃんがあの場合にいたのは、自分の意思？ あの街コンを楽しむにしていた？」

美月が首を横に振ると、優斗はすぐに頷いた。

声の雰囲気からも、最初から美月の答えはわかかっていて、確認のために聞いただけといった感じだ。

「やっぱり浮いてましたよね。あの日、急に参加することになって……」

買い物に行く気でした美月の服装やメイクは、他の参加者の女性とはかなり異なっていた。街コンの間も、それを話題にして舞子の笑いを誘い、話を盛り上げようとする男性がいたくらいだ。

そのことを思い出して俯く。頬に落ちた髪を耳にかけ直していると、コーヒーを飲んだ優斗が言葉が続ける。

「隣にいた君の友達は、準備万端といった感じだったから、その対比が目立ってたよ。それもあって、最初から君の存在は気になっていた」

コーヒーをもう一口飲んで優斗が少し気まずそうに付け足す。

「こんなことを言うと、気分を悪くするかもしれないが……あの時の君は、完全に友達の引き立て役になっていた」

言葉を選ぼうとしても、他の言葉が思いつかなかったのだろう。

優斗が申し訳なさそうに美月を見た。

「……」

それはいつものことだ。

学生の頃からキラキラしていた人気者の舞子と違い、地味な自分には彼女のように輝くものがない。だから、一緒にいて比べられるのはしょうがないことだ。

そんなことを諦め気味に話すと、優斗が緩く首を横に振る。

「誰かを利用しないと輝けない人間は、本当に輝いているとは言わないよ。あの日の君は、君にとって不本意な状況にいなながら、場の空気を悪くしないよう律儀に微笑んでいた。そんな君が泣き出しそうな顔で席を離れようとしたから、気の毒になったんだ」

いたわるような優斗の言葉を聞きながら、美月は自分のマグカップを手にした。薄い磁器を通して、冷たくなっていく指先に飲み物の熱が伝わってくる。

「あそこで榎波さんに声をかけてもらえなかったら、私はすごく惨めな気分のまま帰ったと思います。……今日だって、待ち合わせの場所に榎波さんが来ていなかったら、私は舞子に同情されながら、寂しい一日を過ごしていたでしょう」

「それならよかった」

街コンで優斗に連絡先を聞かれてから今日まで、少女漫画のヒロインになったような気分だった。

優しく、美月への対応は完璧で、女性の扱いに慣れている優斗。

だからこそ、どうして自分に……という疑問が胸に燻っていた。

——なるほど、そういうことだったのか……